

報



會

會 岳 山 本 日

102

月 二 年 六 十 和 昭

日本山岳聯盟の
結成に際して

冠 松次郎

凡そ物の出来るのには必ず由つて来る深い原因があるのでありまして、我が登山界に於きましても、可なり久しい以前から、全山岳界を統一しやうとする氣運が動いて居たのでありますが、未だそれは表面に現はれず、云はゞ同志の間での胎動に過ぎなかつたのであります。

一昨年の暮内閣情報部主催の許に、横溝前情報部長を中心として、都下の山岳團體、軍部、鐵道關係の方々の懇談會が催されたのであります。その節の主題は登山の奨励、登山精神の昂揚、登山界の統一と云ふことであつたと存じます。この催しは確かに登山界統一の促進運動に一つの拍車をかけたものでありまして、爾來關西に於ては全山岳人を打つて一丸とする登山新體制の運動が起り、又東京を中心としても京濱山岳聯合會の結成を見、現時局の進展と共に、その機運は激流の將に堤を破らんとする氣勢を示して來たのであります。

し、遂に同會を動かして今回の日本山岳聯盟の結成運動に對する協力に乗り出したのであります。時恰も興亞聖戰の進展に伴ひ、國民團結の益々強固なることが要求されるに際しまして、同志振ひ立つて茲に愈々日本山岳聯盟の結成を策し、舊服發起人會の結成を見たのであります。爾來年末年始の多忙の際にも拘らず、殆ど連日相寄り相集つて準備工作に没頭したる結果、この程漸くその準備を了へ、今日芽出度結成の式を舉行する運びに至つたのであります。

この問諸方面よりの側面的御援助を受けたことは多大でありまして、特に當局の御助力に負ふ處が少なくないのであります。私はこの機會に於きまして厚く御禮を申し述べます。

要するに日本山岳聯盟は登山を通じての國民運動であります。今更申すまでもなく私等は日本國の臣民であります。肇國の昔からこの方我が祖先より日本精神を繼承し、この時難に處して益々その精神を發揮し、以て我祖先の遺風を顯彰せんとする者であります。而も又私等は、祖國日本の國土に親しみ、其純美なる大自然の懷にあつて、山岳を攀ち、溪谷を跋涉しつつある自然兒であり、山の子であります。

ここでは最早日本精神と登山精神とが離れたものではなく、渾然として一體となつてゐるのであります。故にこの非常時局に際しまして進んで全山岳人を統合して以て登山を通じての一大國民運動を起すことは寧ろ當然でありまして、私は山岳人の内で一人でもここに例外を設けたくはありませぬ、一人でもこの圏外に立つことを欲しないのであります。

目 次

- ・日本山岳聯盟の結成に際して……冠 松次郎……一
- ・冬の黒部雜記……………織内 信彦……二
- ・冬の白峰北岳、間の岳……………東京登山歩溪流會……四
- ・鷹野雄一君戰死……………小谷部全助……五
- ・ヒマラヤン・アクシ……………望月達夫……六
- ・御岳地獄谷踏査報告(二)……………中京山岳會……七
- ・日本山岳聯盟結成經過……………報告……一〇
- ・會員通信……………八
- ・圖書紹介……………九
- ・昭和十五年會計報告……………二一
- ・會務報告……………二二

御援助を仰がずしては有終の美は期し難いと思ひます。

就きましては何卒今後益々當局並に大方の御指導と御支援とを切望して已まないものであります。

以上を以て私の御挨拶と致します。(昭和十六年一月廿八日、日本山岳聯盟の結成式に於て)

冬の黒部雑記



學生部隊の山稜進撃に對して、OB隊は側面の谷から屢々遊撃的に働いて副産物的な收穫を得ようと努めた。しかしその何れもが所期の目的にまで到達出来なかつた。

織内信彦

宇奈月

黒部への旅はやはり雪の宇奈月から始まる。

はしがき
東京農大山岳部は九月以來部の全力を擧げて、嚴冬の黒部川から仙人尾根を登り、劍岳へ往復する企畫に専念した。北仙人尾根は地圖でみても了解出来るやうに、起伏の激しく又瘦せて蜿蜒たる山稜で、それは恰も劍の東北稜をなしてゐるものである。彼等はこれの長くその上高度差の甚だしい劍の東北稜に極地法を展開しやうと試みた譯で、われわれOB側も積極的に援助することになり、茲に嚴冬の黒部左岸の山々に多角的な攻撃を開始したのである。

ところが、結果から言へば實に惨めな敗退の苦杯をなめてしまつたことになつた。しかし學生は山稜に六つの前進天幕を建設し涙ぐましいほど壯烈な敢闘をやつた。

人の善さそうな驛の助役さんは、音澤村や内山村に幾度か電話で交渉してくれたが、この邊には正月を山中に送る物好きは遂に一人も得られない始末。その度に「何しろ正月なもんで」と助役さんの顔が氣の毒さうに言ひ譯する。それでも夜になつてひどく吹雪き始めた頃、やうやく二人の屈強な男がわれわれの希望を叶へてくれ

た。小黒部谷まで約十貫の荷を運んでもらうことである。

それにしても、もう十日も前、吾々の學生部隊が約二十人餘りのボツカにそれぞれ箱詰めにした梱包を百貫餘り擔がせて、列をつくつて此處を出發した壯觀が思ひやられる。

翌朝一九四一年の元旦は輝やかしくも明るい太陽と共に明けた。素晴らしい快晴。學生はもう山稜のどこかの幕營で、正月用の梱包をほどきながら、「プロジクト・ノイヤー」とばかり氣をよくしてゐるに違ひない。

冬期歩道

曾て早春の黒部入りをした(昭和六年)立教の堀田氏は宇奈月から猫又谷の出合まで、黒部特有の物凄い雪崩をよけて實に十数回の渡渉を繰り返しておられる。十年前の黒部はそれほど路が荒れてゐたのである。

ところが、いまは雪崩に閉塞された隧道の出口は、そのやう手前から細い横穴で次の隧道まで連絡してゐるので、歩く困難さといふことは抜きにしても、まづ危険からは解放される。それで、そのかみに猫又まで一日かゝつたものを現在では小黒部谷まで一氣に行かれる。しかし歸りに私はこの道を

一人で阿曾原谷から宇奈月まで下つて来たが、人一人しか通れぬ眞暗な細い間道は、ランブを灯しても光りがまるで吸収されてしまふので、殆ど役にも立たず、しかも、處により何十人といふ大量犠牲者の慰靈の祭壇など設けられて、餘り氣味のいゝものではなかつた。

N 獵師

日電のK氏の斡旋で、折よく入山中だつた獵師のN老とわれわれは猫又谷の出合で行き會つた。

Nはとつて五十三歳、正味三十五年は黒部川流域の山を歩いた。その行動半徑もわりに廣く、猫又、小黒部、祖母谷、餓鬼谷、仙人谷等の支谷は言ふ迄もなく、本流は平の小屋附近迄、劍澤や内蔵の助平の冬まで知つてゐるし、二俣の岩小屋には冬獵に備へて米喰ひのまで用意してあるといふ。たくましい三頭の犬に圍まれて銃を負つたNの足取りは、とうてい五十を越した男とは思へない。

立教部報の三號に堀田氏は「歌の足跡を追つて満足する者と、頂を求めて止まぬ登山者とは、その目的に相副はないものがあり山行上相一致しない場合がある」といふ意味の言葉を述べられ、當時の氏の大計畫の後半が挫折した理由をこの點に擧げておられる。

Nは獵師としても、人間としてもなかく忠實な好人物であるが、やはり獸の棲まない山頂に對してはてんでインタレストがなく、さういふ登山の同伴は御免だと言つてゐた。本流附近の地理の明るさは大いにとるべきものがあるの、かういふ男を伴れて歩いたら大變面白と思はれる。

實は私達も二日間ばかりNと一緒に歩いた。しかし、われわれの所謂歐洲式アルピニズムとこの日本の獵師道との、やはり相容れない現實に兩三度際會して、私はむしろ興味あるものを感じた。ひたむきに山稜に出ようとするわれわれの意慾は、遂にその途上でNのみ下山するといふ結果をさへ生じたのがそれであり、天候の豫知などに獵師仲間の所謂言ひ傳へなどを固執して動けないのがそれである。さうしてわれわれはみすみす一日の快晴を無駄にしてしまつた。

折尾谷乗越の雪洞

折尾谷は仙人谷よりも瘦せて急峻な谷である。それだけに雪崩の危険性を多分に孕んでゐる。仙人尾根へ出る登路としては中ノ谷や阿曾原谷より快適だと思はれるが、支尾根を利用し難いので忠實に谷心を登らねばならず、それだ

け雪崩に對して神經を尖らさねばならない。

なにしろ此の邊りの雪崩ときたら、コンクリートの建築を押し潰すほどの偉大な破壊力を持つてゐるのだから怖ろしいのである。私達は日蔭から日蔭を追ふやうに登つたが、幸ひ東向き斜面であるから日射に影響される時間は比較的短かつた。

乗越まで出ればそこは學生部隊の通過豫定路であり、多分天幕も建設されてゐるだらうと思ひ、全くそれを頼りに疲れた身體に無理を利かせて稜線へ出たところが、天幕はおるか足跡さへも認められなかつた。

しばらくは果然としてしまふ。あきらめられず一時間もブリズムで觀察してゐると、見える見えない雪の防風壁が、三軒も離れた坊主山頂の、折から傾きかゝつた黄昏の斜光線に若い陰影を現はしてゐる。しかし人影は見えない。毛勝、猫又の兩山は悠容として豊な雪の山肌を、目指す銀と八峰は戰闘艦の如く逞しく、鹿島槍は峻鋭として本流を距てゝ望まれる。

當にしてゐた天幕がないからには愈々フオースト・ビヴァクだ。スコップがないので、瀬戸引きの

食器とコッヘルで蓋で山稜の小雪庇に穴を掘り始めた。苦悶三時間、どうにか三人が入れる位の粗末な穴が出来、暖い雑煮を作つて喰べた。

眞暗になると聲を揃へてヤッホーを送る。かすかに應答があるらしいが月がないので解らない。早速花火の信號をやつた。やがて坊主の山頂からも青色發火信號の應答がある。OB隊山稜に在りを連中に確認せしめればも早や用は足りた。程なく吹雪となり、夜半雪の天井が一尺も沈下してわれわれの心臓を寒からしめた。

飯場

黒部には日電の工事が完了しない限り大小さまざまな飯場がある。日電のといふよりは、日電の工事を引受けてゐる土木會社の組の飯場であるらしい。私達は中ノ谷の落口にある飯場を利用した。中ノ谷はケヤキ平からシアイ谷を経て折尾谷の次の谷で阿曾原谷の手前であるが、どういふ譯か地圖にはのつてゐない。

中ノ谷の飯場といふのは、おゝかた鮮人入夫の宿泊所に使はれたものとみえる。といふのはひどく汚れて穢いからである。この穢いことさへ辛棒すれば黒部のこんな奥で、しかも眞冬にこれだけの生

活が營まれるのは、まづコンフォダブルなものと言へば言へるであらう。

飯場から出て飯場へ歸る生活、言ひかへれば本流から出て本流へ戻る勝手馴れた生活、これらが黒部気分とでもいふか、自分達はすっかり黒部の地廻りにでもなつたやうな氣輕さで毎日この邊りを歩き廻つた。

人見平と仙人谷

仙人谷を登るにはその落口が數段の瀧になつてゐる關係上、阿曾原谷から尾根を一つ越して這入るのが得策である。仙人谷の落口の邊りを人見平と言つてゐる。こゝは一昨春關西學聯の人達が鹿島槍から東谷山尾根を下り黒部横斷をした時の渡河點であり、また雲切谷や雲切尾根を偵察するのに恰好な地點なので、私達も一日をこの附近に過してみた。

人見平へ出る爲には攝氏七〇度もある高熱隧道を駆けぬける必要がある。東京の眞夏の暑さがせいぜい攝氏三五度だからその約二倍である。豫め百HPのプロローを轟然と廻しておく。落下する水滴に觸れると火傷をする。それでウインドヤッケを頭から被るのだが、さすが百HPのプロローの効果もそれほど感じないくらい暑

い。全身から脂肪が抜け出て身が輕くなつたやうにさへ思はれる。雲切谷は三段の飛瀑が氷結して相當手強はさうである。スノーブリッチの出来ない本流も、この時期ではよほどの多量降雪でもない

と渡河不能だらう。明日登る仙人谷へのルートの偵察、本流の渡河點、東谷や雲切谷の状況等仔細に研究して有意義な半日であつた。

翌日早朝に中ノ谷の飯場を出て一旦阿曾原谷へ出た。輪かんちきでのラッセルは時々腰迄も潜つてかなり難行、水平道路を越してから左へ尾根に一つつき大分登つて最後の露出してゐる瀧の上から谷へ廻りこんだ。これで落口附近の瀧は全部避けたことになるが、この瀧が下から何番目のものか無雪期を経験してないわれわれには判らなかつた。

こゝまで来ればも早や仙人谷は明るい氣分のいゝ谷であつた。ふり返へるとスバリから白馬までの後立山が眼の前に見える。鹿島の北槍から猛烈に雪煙が巻いてゐる。

重い荷と輪かんちきのラッセルと雪崩への對策。午後三時にやうやく仙人湯まで登つた。涼々と湯氣をあげて地肌までむき出してゐる。腰を下ろすとホカ／＼暖い。簡単な小屋掛けをすれば立派に使

用出来るのに、通る人も稀だから利用價值がないのであらう。天候とにらみ合せて前進をあきらめ、次の屈曲點まで行つて引き返へした。(私の下山した翌日に残つた油井、麓の兩君が前日のラッセルの後を約半分の時間で仙人谷から池ノ平へ出ることに成功した。)

むすび

多忙な勤務をもつ限られた日數で遠い山へ行く爲には、凡ゆる意味での犠牲が拂はれる。それをしつも押し切つて出掛けて行つたあとには、やつぱり来てよかつたといふ極く平凡な結論が得られるのであつた。そして高い山でなければ受けられない感動を、何時までも快いものに思ふのである。遂に日數に制限されて山頂の雪さえ踏まずに歸つて來たのだが、冬の黒部川とそれを圍む山々の、あのスケールの大ききにはすっかり惚れ込んでしまつた。そして、山腹を貫く隧道や垂直數百メートルのエレベーター、或ひは高熱隧道など土木工事のスケールの大ききにも同じやうな驚異を感じた。自然や風光地を破壊するといふ問題とは全く切り離して、これは大きな科學的見學旅行にもなつた。殊にわれわれの職業からみて大變有益なものであつたやうな後味が残つてゐる。



冬の白峰北岳 間の岳

東京登歩溪流會

私達の雪中幕營による合宿は、これで三回目であります。會現在の天幕による收容人員は僅かに七人である爲に、これまで大規模の計畫をすることが出来ませんでした。將來のより大きな飛躍の爲には、出来るだけ多くの人を訓練する必要を感じ、且は冬山に對する総合的な訓練は天幕生活と言ふような不自由勝なものによつて、より多く期待出来ると考へ、更に優れた人達のみで思ひ／＼の山に登ることの集團的意義？と言ふやうなことも考へて、北岳行を計畫したのでした。總員十四名、この中には数名の新人も入つて居ります。この計畫は昨年度の木曾駒

縱走のやうな積極的なものではありませんでした。會全體のレヴェルを引上げると言ふ主目的の爲に止むを得なかつたのです。既に數年前の一月單獨行で登つて居る山口が快くリーダーを引受けて、十一月中旬に決定、直ちに準備を進めたのでした。人員が多い爲めとかく種々の混亂を招く事を考察して隊を四班に編成し、別に本部を設けて全隊を指揮するようにしたので。即ち各班にリーダー及び庶務擔當者一名を置き、本部に於ては全隊に關する総合的な準備をなし、天幕生活を中心とする諸準備は各班單位にすることにしました。食糧は大體に於て本部により取揃えて各班に分配する事、各班は基本食料を除いては多少の變更を加へることも認めたのでした。食料に關しては紙数が許さないので他の機會に譲ることにしましたが、物資不足の折からかなり困つたのですが、多くの未知の人から絶大な御好意を受けたことは感謝の至りでした。

次に行動に就て簡単に報告致します。

昭和十六年一月一日 快晴

芦安(七・三〇)―夜叉神峠(一・三〇)―二二〇〇―蝮平小舎(三・三〇)泊

先發の三名に龍王驛で迎へられて全員揃ふ。地元の好意による自動車で芦安に向ふ。芦安に着く頃漸く東の空も白んで來た。芦安で、先に送つてあつた荷物と共に山のような荷物を十四人が組替える事は、戦場のような騒ぎであつたが、豫め決定してあつた隊の編成によつて極めてスムーズに行はれ、僅かの時間で出來た。ポーター二人、新聞關係の人三人を入れて十九人の大部隊となつて、七時半芦安を出た。快晴無風、汗をかき／＼夜叉神峠に着く。あゝ、白峰三山の純白な巨大な姿よ、全員の荷の重味も忘れ、張切つて峠を下り、蝮平の小舎へ。

一月二日 快晴

小舎(六・四〇)―釣尾根の池の幕營地(一・四〇)

ポーターは小舎までなので今日の荷物は倍加される。最低七貫、最高は十貫以上もある荷物だつた。木の間越しに覗く白銀の峯に僅かに慰めを見出し乍ら、胸をつく急坂を攀じて行つた。それでも皆な元氣に頑張つて二時間には池に着くことが出來た。意外に妙なかつた雪も、この邊りから三、四十種以上あり。元氣な四名はリーダーの命で明日に備へて池から上の樹林帯をラッセルしに行く、殘

員は直ちに雪を掘つて天幕の設置にかゝる。やがて美しい白樺の疎林の間に四つの天幕が張られた。日が落ちる頃重なるアルバイトに疲れも見せず、ラッセル班も元氣に歸り天幕の第一夜を迎へた。

一月三日 快晴

北岳登頂

バーティ― 山口、杉本、島田、丹羽、小林、川上、重岡
天幕(七・三〇)―亡魂澤ノ頭(九・四〇)―八本商ノコル(一・三〇)―北岳頂上(二・二五)―一・〇〇―亡魂澤ノ頭(一・三〇)―三・〇〇―天幕(四・〇〇)

夜半から晩にかけての小雪と烈しい風に一日休養かと思つて居たが、夜明けと共に快晴が豫想されたので急ぎ準備を早め、北岳に向ふ。昨日のラッセルによつて時間をはかり詰めることが出來た。亡魂澤ノ頭に出ると北岳バットレスの素晴らしい景観が望まれた。八本商の落込は、妙い雪の爲に、グッシュがハンドホールドとして使へる程度、岩の上に積つた雪が足下から崩れて不安定ではあつたが、用意したザイルを使用する程ではなかつた。コルから主稜まで三十分、主稜からは夏徑が處々出て居るのを辿つて北岳の頂に立つ。持參の日章旗を打立て、皇居を遙拜

し、出征將士の武運長久を祈る。

一月四日 快晴

間の岳登頂

バーティ― 山口、丹羽、川上天幕(四・〇〇)―主稜(八・三〇)―間の岳(一・三五一)―一・五〇―主稜(二・一〇)―一・三〇―天幕(二・四〇)

北岳班に先んじて天幕を出たが、夜明まで強風と霧の爲め後發の北岳班に追ひ付かれ八本商ノ頭まで同行する。八本商の峻も今朝は完全な路となり、氣樂に駆け下りることが出來た。北岳、中ノ岳の鞍部へ掘む商大ルートも考へて見たが、時間的に大差もないので一度主稜まで登る。主稜から最低鞍部までの野呂川側を掘む下降が未だ日蔭の故か氷に近い硬雪の急斜面で、トラウヴァースは一寸緊張した。慎重に辿り着いた鞍部は稜線中一番風當り強く、皆同志湧き前傾して前進を續けた。中ノ岳の登りを終へれば風も漸次なぞ、廣い安易な尾根と、小さい突起のいくつかを越えて間ノ岳の頂上に着く。氣温零下八度。小憩して再び往路通り天幕に歸へる。

北岳登頂

バーティ― 杉本、島田、重岡、小林、大谷、矢澤、笹淵、川名、植松、村井、大井
天幕(四・三〇)―八本商ノコル

(八・三〇)―主校(九・二〇)―
九・五〇)―北岳(一〇・一〇)―
一〇・四五)―天幕(一一・三〇)―

八本商も前日の状態では多人数が通過するのに不安を感じて居たが、踏固めた跡がラストして極めて安全な状態で、短時間に全員が通過することが出来た。そして十時迄には全員が北岳の頂上に立つて再び感激の日章旗を打振ることが出来た。

一月五日 快晴

天幕撤収―蟻平小舎

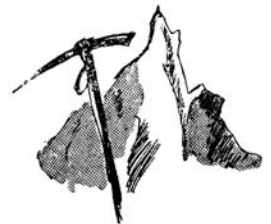
前夜の決定により、天幕を撤収。懐しの天幕地を去る。蟻平小舎まで、登り六、七時間を要したものが僅か二、三時間で下ることが出来た。時間は早かったが、鮎差の小舎はひどいのでこゝに泊る事にした。

一月六日 快晴

蟻平小舎―夜叉神峠―芦安―

甲府

六日前に越えて来た夜叉神峠、今振返へつて見る白峰三山の姿は来る時と少しも變らないが、来る時とは全く違つた氣持で振返り振返り峠を下る。みんな雪焼けの赤黒い顔に、ぼう／＼と延びた髭に何か目頭の熱くなるものを感じながら。



鷹野雄一君戦死さる

小谷部全助

事變勃發以來吾々山仲間からも多くの戦士を大陸に送り、その鍛え上げた心身は國家の干城としても多大の勇名を馳せて、銃後の私共迄肩身が廣い譯だが、その蔭に壯烈な戦死を遂げられた数々の英靈も不埒無言の凱旋を續けられて居る事實には、洵に胸ふさがる思ひである。この度も最も親しかった岳友鷹野中尉が、昨年十月十四日午後四時頃、中支浙江省某地の戦闘で壯烈な戦死をされた旨突然の報を受けた私は暫く茫然自失の態であつた。あんな氣持のいい元氣な男が一體戦死などする譯があるものかと、一時は妙に懷疑的な氣持になつた程、月並な言ひ草だがこの報せは實感が伴はなかつた。然かももう直ぐ歸還との噂もたつて居た折柄だつたので尙更である。

扱、早くから山の魅力にひかれて居た彼は、昭和八年東京商大専門部へ入學されるや直ちに一橋山岳部へ入られ、爾來卒業迄の三年間と言ふもの、本當に比類のない充實振りをその山行に示され、私も度々行を偕にして来た譯だが、顧ると私自身の所謂アルビニズムの目覺めとでも云ふべき氣分は、彼との登行で培はれたと言つても過言ではないと思ふのである。

おつとりとした性質の裏に熱情を秘めて、その云ふ所、爲す所は少しも目立たぬが底を貫く強引な意力は、假令歩度は早からずとも知らず／＼の内に登行の都度バートーの大きな推進力になつて来たのであつた。

實際の處、悪く云へば御多聞に洩れず彼も山男らしい筆不精、無口の傾向で、爲に當會報の讀者も「針葉樹」なる部報を通讀された方以外、元老高野鷹藏氏の名前は知つてゐても彼の方は知る人も寡いのではないかと思ふが、云ふ迄もなく山男の價値と言ふものは、デナーリズムの表面に華々しく躍る事などによつて計らるべきものでは決してない。彼こそは隠れた山の立派な戦士でもあり、その力量と言ひ氣分と言ひ悉く共鳴し尊敬して居た私は、今ふいにその計報を手にして急に信ぜられなかつたのも當然であらう。そして日の經つにつれて、愈々深く哀惜の情がやるせなくこみ上げて来るのを、どうしようもないのである。

お互に例の筆不精の爲、碌々ハガキも交さなかつたが、今死なれて見て初めてザイルパーティーと言ふものゝつながりの如何に深いのかを、つく／＼感じさせられた次第であつた。

この正月同じ部のOBであり本會々員でもある村尾、堀岡兩氏等と穂高を歩いた時、徳澤小屋の西山爺さんにも彼の戦死を話した處、よく記憶して居て、数年前の正月奥又白から北尾根を攀じた時の話等々思ひ出はそれからそれと盡きぬものがあつた。これからは大抵の山を歩いて、そこには必ず彼の思ひ出があり、追憶に胸を熱くするに違ひないと思ふ。それ程に彼の山行と言ふものは、比較的短期間にも不拘萬遍なかつたのである。

最後に逢つたのは十三年の六月だつたと記憶して居る。軍務の餘暇に大阪へ遊びに来て私を會社に

「會報」合本

五十一號から百號迄の合本を御引受け致します。同封總目錄お添への上御申込み下さい。

◆製本代 一圓八十錢

◆書寫送料 二十錢

・體裁は一號から五十號迄のものと大體同じです。

ふものがあつたのか、其の前後の便りにも死ぬかも知れぬと言ふ言葉は、可成り數多く書かれて居た様に覺えて居る。これから見ても十分の覺悟のあつた事が想像され、陛下の赤子として、將又山男としてその嘸かし立派だつたであらう岳友の最後を偲び、默禱して筆を擱く次第である。(一月十九日記)

一九三九年のヒマラヤ遠征に際しては、K2のアメリカ隊、ガールの瑞西隊及びポーランド隊が奇しくも手厳しいアクシデントに遭つて損害を蒙つてゐるが、右の中K2のは隊の連絡に缺陷があつたのであり、後の二つは先年のナンガ・パルバットの場合同様、キャンプを雪崩にもつていかれたものであつた。



☆ ニヤラマヒ ☆

☆ トンデシクア ☆

これ等の遭難に就いてヒマラヤン・ジャーナルの編者ケニス・メイスン教授は、左の様な興味深い忠告を與へてゐる。以下同教授の所論——(H. J. Vol. XII. 1940. P. 138—)

一九三七年六月十四日の夜、ナンガ・パルバットの第四キャンプに睡むる獨逸隊の面々は、巨大な雪崩に埋め盡されてしまつた。

そのキャンプは恐らく危険の近寄らぬ安全場所と考へられてをり、當時多くの山岳雜誌にこの特殊な突發事が論評せられた。一九三九年のチャウカンバ(瑞西隊)、トリズリ(ポーランド隊)でもこれと全く同じアクシデントが惹起されたらしい。兩者共キャンプに入つてゐた時に潰されたものであり、又兩者共ヒマラヤの状態には不慣れなものであり、私の意見を以てすれば、今迄の成功から總てを過信し、ヒマラヤの氷の斜面に對して絶対に拂はねばならぬ細心の注意を蔑にしたことに原因があると思ふ。故に獨逸隊、ポーランド隊、瑞西隊の蒙つた慘禍の原因は、ヒマラヤの氷の状態を無視してキャンプ地を選択したと云ふ點に、根本的な誤りが在つたと結論し得るであらう。若し然らざればそれは越ゆ可からざる危険を冒してゐたと云ふ可きである。

假にこれ等三つの遭難の原因が、無知乃至は判斷力の缺除によるものと辨明し得ても、なにを以てK2の災禍を辯解することが出来るやうか? この場合には着實な登攀の凡そあらゆる原則が無視せられたと云へるであらう。そして唯一の僥倖と晴天とが、より以上の悪い結果を食ひ止めたのであつた。一九三四年のナンガ・パルバットの遭難と全く同じことが云へるので、その時隊長ウィリイ・メルクルは、七月八日C8で暴風雪に遭遇し、各天幕間の連絡が悪く、爲に高所キャンプに居た隊員の殆ど全部が斃れて了つたのである。一九三九年七月十五日から廿一日の間、K2米國遠征隊々長ウィスナーは、下方からの連絡の届かぬ處に在つた。十七日に隊の食糧供給機能が全く放棄されてゐたことを彼は知らなかつた。隊長であつた彼は隊員中に一人の病人と一人の衰弱者のあるを知りつゝも、尙成功を夢見つゝ五日間も前進を敢行した。十五、十六日の悪天候がもう二、三日続き、加ふるに十三日人夫に命じられたことが實行されたならば、彼等の或る者が生存し得たかどうか甚だ疑問である。一九三八年K2の偵察は實に輝かしい業績であつた。山頂攻撃の期間中は例外的な好晴に恵まれたのである。然もハウストンは次のやうに記してゐる。

ことをまざ／＼と知つたのであつた。
吾々がまだC4に居た頃から天氣は曇り出し、B・Cに歸つた時には山の上部はすっかり雲に包まれて、一週間後バルトロ氷河を去る時も、まだ山には雲が絡み附いてゐた。
K2では七月の後半に悪天候に遭遇すると云ふ、明白強力な警告が爰にある。何故一九三九年にこれが無視されたのであらうか? 何故、多くの隊員がそれ以上の活動に堪え得られなくなつた七月十一日に、山頂攻撃を放棄しなかつたのであらうか? K2地域では、何等例外でなくむしろ普通の状態である六月の悪天候に禍ひされて、その日には隊は隊員三名、人夫七名に縮小されて了つた。病人と掲て、加えて過激な労働の爲に、「可動的小遠征隊」本來の力は非常に弱いものとなつた。残つた隊員の多くは疲勞し切つてゐた。然も三人の隊員中一人は十三日に、今一人は十七日に落伍して了つた。人夫の士氣はそれでも最後迄變らずに保たれてゐた。それは遭難を防がんとした彼等の超人的な努力を見ても明らかであらう。若しウォルフの處へ到達して、二十八日に無理にでも彼を下降せしめ得る登攀隊員が一人でもゐたなら、あの災禍は未然に防ぐことが出来たかも知れない。併し事實は全隊員が全く無力となつてゐたのである。

以上は幾分苛酷な言葉と思はれるかも知れない。併し登山家に於て雄渾なヒマラヤに登るからには、あの小さなアルプスやロッキイの山々を一日も早く忘れ、そうすることによつて一歩でも成功の彼岸に近づくことを知らねばならない。「可動的小遠征隊」の主唱者達は良くこの教訓を心に刻みつけて置かれた。二一、四〇〇呎の地點にC4を建設することは、六人の登攀者で充分であつたにしても、山頂攻撃に残されたものが一人の健全者と、二人の疲勞者であつた時には、登攀は當然放棄さる可しと云ふのが、正當な考へ方であり、又着實ないき方であらう。何故ならば隊は餘りにも弱くなつてをり、成功はたゞ保證し得ざる危険を冒しあらゆる規則を無視し、人夫の生命を惜し氣もなく犠牲にする事に依つてのみ、僅に僥倖せられるからである。
アルプスの状態と高峻なヒマラヤのそれとの間には非常な差異があることは、既に何回か證明されてきた。この教訓を一日も早く體得すれば、それだけヒマラヤ登山に有效なのである。何故ならば、

一九三九年に於けるやうな遠征隊は、假令如何程山嶺が登頂されたにしても、甚だ不名譽な失敗として記録される以外に途はないから

である。「アイガーヴァンド」の戦術は高峻なヒマラヤやカラコラムに於ては害悪以外の何物でもない。
(望月達夫)



御岳地獄谷踏査報告 2

中京山岳會

第二、第三隊報告

六月二十一日午前二時、第一隊を王瀧山頂に送つて後、吾々は王瀧口に一泊、午前十時御料の森林鐵道に便乗を許されて正午過ぎ濁川温泉に入る。一時間半の休憩後赤川の偵察に向ふ。

問題は濁行第一番にぶつかる十五米の瀧である。前回は左手のガレに大きく跨つてゐる岩門(假稱・地獄谷の裏門)をくぐり高捲きの後瀧の上へ下りたが、時間の浪費等の爲め、今回は梯子によつて乗り切らうと考へた。併し第二隊二

人の力では擔ぎ上げる事は不可能である。また一方第三隊の豫定たるブッシュの酷い尾根筋の登高も困難であり、右岸のバンド傳ひに先行するならば、不慮の落石を濁行隊におとすのみ、下降隊も本日の快晴にまづ豫期以上の成果を擧げてゐるものと見るべく、第三隊の應援は必要とすまい。結局第二第三隊は合流して梯子に全力を注ぐこととした。

二十二日快晴、午前五時濁川温泉出發、八時下の廊下取付き、第一の瀧下に立つ。昨日手配の倒木

に五寸釘三十本打ちつけ梯子を作る。九時半行動開始、第一の瀧を直登、第二、第三の瀧は五米の小さいものであるが、何れも七十度傾斜で登攀に味がある。蒼米に鏝はれた前回四月の偵察に比べて谷幅も案外廣く感ぜられ、四、五米はあらう。流れも思つた程でなく、瀧壺で腰まで浸るに過ぎない。岩肌は熔岩特有の複雑な相を呈し、非常に脆い部分と硬い部分が交錯してゐる。第四の瀧は逆層に悩まされつひに右岸を捲く。岩稜からバンドへと順次追ひあげられ、七〇米も捲いたところ、突然上から物凄い落石に見舞れる。

下降隊だ、もう正午に近い。パーティの行動と共に落石が頻々とくる。安全地帯へ避難する。午後〇時四十分、兩隊は感激の握手を交し、下降隊はそのまゝバンド傳ひに裏門を下る。吾々は此の地點から懸垂下降三十米の後再び谷底へ下つた。

下の廊下は濁るにつれてますます深く、ヒシ／＼と迫り来る幽谷の迫力にこの世のものとも思はれず、雪崩の堆積によるクレヴァスの間を抜けてなほも進むと、思ひがけない前方に高く懸つてゐる大飛瀑、七十米は優にあらう。しかもその下に更に二十米の瀧がある。これを登ること捲くことは共に

に思ひも寄らぬことであり、吾々はたゞ果然とケルンを堆むことさへ忘れて見上げるのみ。こゝはも早や山男の登攀技術を對象としたものではない。この感激は何か、遙かに高い精神的な何物かを藏してゐる。こゝより引返すこととし、吾々はすべての瀧を直降、夜七時半すぎ根據地に着き、王瀧川本谷隊の歸着を待つたのである。

(時間記録)

六月二十一日 御料森林鐵道田島驛發(前)一〇〇〇—濁川温泉(後)一〇〇一・四〇—偵察
二十二日 温泉(前五・二〇)—赤川白川合(六・五〇)—下の廊下取附(八・〇五)—九・三〇—梯子製作—第一の瀧上(一〇・〇五)—第二の瀧(一〇・一〇)—一〇・二五—第三の瀧(一〇・三〇)—一〇・四五—第四の瀧(一〇・五〇)—第五の瀧(右岸五十米上)(後)一・一五—下降隊と會合—第五の瀧上へ下降(一・三〇)—七十米の大瀧下(三・〇〇)—三・三〇—濁川温泉(七・四五)

第四隊報告

六月二十一日 王瀧川本流の完全な濁行を目指し進む。川は明るく、水かさも少なく、流らしい瀧もなく樂な濁行を續けたが、百間の瀧の處ではこれを左に捲き、俣松の密生地帯に出た頃日も既に傾いたのでビヴァークの第一夜をおくる。あたりを野猿が騒ぎまはつてゐた。

二十二日 國境尾根北側の尺ナシツ谷を偵察したが、これも驚く可き惡谷だ。引返して國境尾根を繼母岳へ三浦山より俣松を泳いで登る。六時間のアルバイトは文字通り死闘だつた。繼母岳第三ピーク王瀧川源流に歡喜のケルンを積み、白川源流(白地獄)へ下る。白地獄は水成岩を激しくえぐり取つた斷崖の連續であり、そのスケールの大、凄みに共に赤地獄に譲らない。こゝも亦硫酸ガスの惡臭咽喉を襲ひ、流れは硫黄を含み、牛乳色で飲用出来ず、殘雪も眞黄色に染つてゐる。等高線二千米地點まで下ると七十米の瀧上に出る。こゝで進退窮してビヴァーク第二夜を過す。

二十三日 引き返しガレを登り三浦山よりの尾根へ出る。こゝらあたりは梅と熊笹の連續であるが、ウツカリして熊笹のなだらかな斜面に誘ひ込まれたら遭難ものだ。腹をきめて行き詰つたらそれまでと、常に斷崖側にルートをとつて下る。幾つかのピークを越え、下黒澤の源流へ出て、御料の小屋へ下り、以後は木馬道に沿つて濁川温泉へ下ることが出来た。

(時間記録)

六月二十一日 晴 御料森林鐵道田島驛(一〇・〇〇)—三浦(後)一・三〇—三浦御料本谷出張所(一・

五〇―軌道終點(二・一〇)―林用小屋三・〇〇―八重ダル出合(三・三〇)―國境尾根(五・一〇)―ビヅアック地點(六・一〇)―
 二十二日 晴 ビヅアック地點(前四・四〇)―下呂道と小坂への林道出合(六・一五)―尺ナズ澤偵察(七・〇〇)―前記出合(八・三〇)―繼母岳頂上(後一・四〇)―繼母岳第三ピーク(三・四〇)―白川源流



會員通信

中支戦線にて 濱野正男

二六〇一年を迎へ會員諸兄益々御發展の事と存じます。小生も中支に於ける正月を迎へ益々皇軍の爲に盡力致す覚悟で居ります。先日この葉書(註・繪葉書の繪は、

へ下る―七十米瀧上(五・〇五)―ビヅアック地點(五・二〇)

四・〇〇)―飛驒尾根(五・二〇)―尾根を南下して下黒澤御料伐村小屋(八・一〇)―九・五〇)―濁川温泉(一・一三)―後(〇・二五)―大谷淵(二・三〇)―上松(四・三五)地獄隊と合流す。

以上

玄武湖より紫金山を望めるもの)の山々も雪が來ました。いまでも雪雲が取り着いて居ります。會員諸兄の御健闘を祈ります。草々

(一月五日)

北鮮蓮花山 方 炫

冠省 北鮮の山、蓮花山の麓ベースキャンで榮えある紀元二千六百一年の新春のお祝ひを申し上げます。

京城で早大冠帽峰登攀先發隊の方々に會ひ、先般御紹介下さいました關根隊長にはお會ひ出來ずに残念でした。

私達は北鮮の山に二つのパーティーを送り、私達は蓮花山(二三五五米)に決まり、十二月三十一日牛橋を驅つて秋物嶺のコルを越え、一月一日BCを南の澤に張り、三日BCで本隊と合流するまで、C1へのラッセルと輸送がすみ、本隊と一緒にBCより中繼キャンブを張り、本隊員二人缺除のため

パーティーを分けられず、四人のためC2建設は隊員と日程の關係上あきらめ、一月五日C1を主峰と二二九一米峰との間の肩に張り、二二九一米峰より二二二二米峰の縦走と、一月七日午前十一時四十分主峰に登頂致しました。今年は昨年冬の北水白山の一月の山行に比して、気温も低くなく最低C1で零下二十八度以下を下らずにすみました。

併し南の澤のせいか積雪量多くC1建設には斜面はクラストしてクランポンを用ひ楽しい山旅でした。五日振りにC1の撤収をすませ、BCで休みを取つてゐます。

BCより見える眞白なドーム型のゆるい山稜には灰かに雪煙が舞ひ上り、碧空にとても美しく光つてゐます。

内地の會の皆様も素晴らしい山行を楽しんで居られる事と思ひます。遙か北鮮の山麓で會の皆様方の山行を祝福し、新春のお祝ひに代へます。

(一月七日蓮花山麓にて)

日光の小舎にて 吉阪隆正

帝室林野局の新しい山の家に参りました。今日開設式ですが中々立派なものです。昨夜ついた時は月に照らされて、如何にも楽しさうでした。今日は白い風につつま

れてゐます。併しストーブのまはり、どつしりした肘掛椅子を出して圍む気分は悪くありません。

光のよく入る誠に明るい小舎です。一〇〇人まで泊り得るさうですが、それだけ入つても恐らくまだ割りに餘裕があるでせう。唯惜しむらくは、あまりに明るさに氣をつけて、扉や窓の棧の細々として頼りなく(實際は太いのですが)見える事です。

(二六〇一年正月二日)★カットは右の文中にある日光湯元に新設された小舎

……吉阪君作

徳高行 山本敏三

拜啓 一日より十日迄穂高岳川に入りました。雪線社の部員八名を引きつれての合宿です。天候に恵まれて人夫を使用せず、全くの部員の力で岳川森林帯にBCを、天狗澤下にC1を、天狗のコルにC2を建設。天狗コルに三パーティー、ダンダラムに二パーティー、飛驒尾根に一パーティーを送つて成功しました。毎日の天候が快晴又快晴で恵まれたコンディションでしたが、全部員が一日も休養せず動いてくれた賜です。春の様な景色でスキーは天狗のコル迄使用できました。何れ詳細は何かで御知らせ出来る事と思ひます

が、不取敢御報告いたします。草々 (一月十二日)

朝日連峰 岩永信雄

拜啓 其後は全く御無沙汰勝手にて失禮致しました。若き會員諸兄益々御活躍の事と思つて居ります。小生小暇を得元日出發、鮎貝に至り一泊、二日快晴にて九時頃出發、黒鴨中平を経て日蔭にて午食、午後より頭殿夏路を辿りて折柄の晴天にて周圍の眺望を楽しみつゝ夕方朝日鏡泉着。三日より五日まで天候不良のため鏡泉宿に止まり、六日午後晴天となりしかば御影森登山を志し、上倉山三角點まで路をつけその間朝日連峰を眺め得たり。七日は快晴にて七時半出發、前日の路を辿り九時上倉山へ着、これより尾根を進み午近く御影森頂上着、風少しくありしも快晴にて眺望良く快哉を叫び下山、九日も又珍らしく晴天にて頭殿より朝日連峰を眺められ、愉快な旅を試みました。(一月十四日)

集ひ一つ

非常な湿度の上に常時三二度と云ふ高温の佛領印度支那に三ヶ月間滞在したにも拘らず、六十キロ以上に肥大したと稱する藤島敏男氏が歸京されたので、一月十五日

銀座中島別館で十一人の會員と夫人方三人が集りました。

羽田—臺北—廣東—ハノイとガソリンエンジンに乗せられ、大本營囑託と云ふ厳しい肩書はハノイの自動車旅行等で面白い目にも會ひ等の話が、モ—のたる煙草の煙りの中に聞こへだす頃はアルコ—ルの方も大分廻つて来て、殿りに馳せつけた通信官吏を含めていづれ劣らぬ豪もの並ひ、其の邊りから話を聞くのか聞かせるのか、時々障子を一杯に引明けて煙と一緒に氣焔の焔も追出さねば笑聲に振止められた話の後が續かぬと云ふ次第。

七面山へお籠りに行つた話、鐵道郵便改札口よりスキー持込みのテ等とこの休の話題も盡きず、最後に在上海松方七五キロに寄書をして散會となりました。

料理は上乘と迄はゆき兼ねましたが、ゆとり多き會合、慌だしい世相から云へば此の大きな忘れ物——ゆとり——をふと探し當てたとも云へませう。(K・H)

(集つた人々)

横有恒、三田幸夫、藤島敏男、同夫人、島田巽、同夫人、松方夫人、黒田孝雄、櫻井信雄、田中晋雄、成瀬岩雄、田邊主計、今井田研二郎、初見一雄



圖書紹介

山旅の素描

茨木猪之吉著 三省堂刊

さういつては變かも知れないが、もとをとる、事の出来る本に幾種類がある。買つて置くと次第に値が出て、古本屋へ賣る頃には大分高くなる本とか、書棚へ飾つて置いて友人をおどすによい本等がそれである。併し之等は下に屬する。

さうでなくて、その本を得た事によつて大いに啓發されるとか、何度讀みなほしても新たな感激の湧く本がある。之は上の部に屬する。

茨木氏のこの本は後者に屬する

ものである。それは値が廉い上に殆んど各頁に挿繪があるからだ。もと「山の素描を中心として單行本に纏め」たものであるからそれは當然といへば當然かも知れない。だがどのスケッチを見てゐても、如何にも山の氣分がみなぎつてゐて、何回眺めても倦まない。

亂暴な位大膽な筆で簡単に描かれた山々や、そこに働く人々が、それでゐて各人に色々な山の思ひ出を引き出すに十分な力がある。だから何回見なほしても興味津々たるものがある。文章など讀まなくても十分に味はへる。大體文章の方は古くさい事が多い。「繪畫と登山に精進し始めてから四十年近くなられる」さうだからそれは無理もない事だが、その意味に於て回顧的な面白味もある。

兎に角眺めてゐると愉快になる本である。(吉阪記)

西藏・過去と現在

チャールス・ベル著

田中一呂譯 アジア内陸叢刊
昭和十五年九月 生活社刊行
菊判四七〇頁 寫眞版並地圖

原著者チャールス・ベルの名前は英國エヴ・レスト遠征の初期の歴史に關心を持たれてゐる人には、既に親しい名前であらう。「一九二〇年に第一回エヴ・レスト遠征の許可が得られたのも、チャールス・ベル卿とグライ・ラマとの昵懇な關係に依る所甚大であつた」とは、近年西藏使節團の隨員として拉薩に赴き、途次チンモラアリイ峰に登頂したS・チャップマンも述べてゐる所である。又彼がエヴ・レストの山名に就いて、極めて興味深い示唆を與へてゐることも思ひ出されるであらう(本會報七八號參照)。實に彼は四十餘年を印度西藏に過し、西藏に關する稀にみる權威となつたのである。

このやうな彼の著書である本書「(Tibet, Past and Present, 1924)の價値も自ら明らかであらう。ヒマラヤ及び中央亞細亞の山々を屈指する人々にとつては、又その地域の諸般の事情が大凡そは理解されてゐなければならぬ。本書は元より大陸に乗り出した吾國の將來の爲に、アジア内奥の古典的研究の必要さから譯出されたものに違ひないが、アジアの山々に關心の深い吾々にとつても亦充分活用され、愛讀されていゝと思ふ。たゞ原著が十五年も前に刊行されたため、最近の西藏事情を知る可くもなく、その點については前記チャップマンの「Lhasa: The Holy City, 1938」の方が良い。然し十八世紀頃から今世紀初頭へかけての西藏の歴史、殊に對英關係は實に鮮やかに糸がき出されてゐる。

譯文も讀み易く、且英文字綴りの地名は一つ／＼丁寧に漢字が添へられてゐて、譯者の苦心も一通りでなかつたことが肯ける。

尙これと同じシリウスにはオーレル・スタイン「中央亞細亞踏査記」ブルシェヴ・アルスキー「蒙古と青海」其他の名著の譯書が刊行されてをり、吾々にとつても非常に有難い次第だが、紙質、裝幀の割に價格が高いことは遺憾に思ふ。右の二書についても他日折にふれて書いてみたい。

雪線 第十六號

昭和十五年十二月大阪商科大
學山岳部發行 菊版一七八頁
寫眞二葉 地圖二面 騰寫版
刷

毎年定期的に發行されてゐる部内報告で、本號は昭和十四年七月から十五年六月迄の部の行動を纏めたもの。主要内容は「鴨綠江源流踏査報告」と「冬の鹿島槍天狗尾根」の二つと、森本君による「遠征・食糧・パッキング」の研究とである。

昭和十五年三月の鴨綠江源流踏査、白頭山登頂は、とも角も最近に於ける學生登山界の一收穫であり、高く評價されていゝものである。記述は隊長片山君以下七名の隊員により手際よくまとめられてをり、挿入の寫眞も珍らしいも

昭和十五年度歳入歳出決算内譯
及ビ十四年度トノ比較表

消耗品費	四一・八二	二五一・九四
------	-------	--------

支部消耗品費 三一・〇〇

通信費	三〇五・一九	四〇三・九五
-----	--------	--------

本部通信費	一三・五四
-------	-------

電話料 七三・〇三 七一・三三

雜費	三六一・三三	三六・三六
----	--------	-------

支本部雜費	三三六・八一
支本部雜費	二四・五一

業費	二、七二〇・二〇	二、六四一・二八
----	----------	----------

出版費	二、一〇六・一五	二、二三五・九二
-----	----------	----------

會 報 費	一 〇 九 六 ・ 五 九	一 五 八 〇 ・ 八 四
-------------	---------------------------------	---------------------------------

山岳編輯費 四七・〇五

山日記編輯費 二〇七・七五

集會費	一七〇・五〇	二五四・九六
三二・七九		

本部集會費 一四〇・五六

支部集會費 四〇・〇九

請 海 會 堂	一 三 一 ・ 一 四
臨 寺 費 （山 岳 締 盟 集 前 受）	一 二 四 ・ 七 六

谷川山小屋寄附

受入金支拂

出(昭和十六年)	入
六〇九三・〇七	六三三・二一
五十一〇・二四	六三三・二一

左引剩餘金(度へ繰越)	二十五万・一一	一〇五万・一一
-------------	---------	---------

乘館金内證
八・一八・四五（日本共友銀行淺高）
四・五八・二〇（辰春寺金淺高）

一七三・一七(鴻池信託基金元本へ組入レ) 一三〇・三五(現金殘高)

七九・〇四（關西支部振替貯金殘高及現金）

合計	八、八五二・一八	六、七六八・三四
----	----------	----------

本年剩餘金八二、七五九圓一ナレドモ、尙山岳二號出版費支

差引スレバ剩餘金ハ一、五五八圓餘トナル。

同昨年度繰越金一、〇五八圓ヲ差引ケ六、本年度ノ收支差引剩餘金八五

○ ○ ○ ○ ○



會務報告

一月定例理事會並 役員總會報告

一月十六日(木)午後六時半 於虎ノ門本會事務所

出席者 木暮、冠、木村、横、黒田、中司、加藤、角田、西堀、吉澤、塚本、望月、委任十六名
役員總會

一、日本山岳聯盟結成經過報告
冠、吉澤兩氏より報告ありたり
日本山岳會と聯盟との關係につき種々協議せり。

一、社團法人の件

本日附にて厚生大臣より認可ありたる旨加藤理事より報告ありたり。よつて創立總會を二月中に開催する事に決定す。

理事會

一、昭和十五年度收支決算報告
別記の通り塚本理事より報告。

一、新年度豫算並事業について
次回理事會にて検討すること。

一、編輯經過報告

一、左記入會申込者承認。

樋口元之助、木下正太郎、植村

耕三、戸田宗吉、三田尾松太郎
柳文治郎、伊藤幸一、岩瀬八雄
以上

代表者變更

第三高等學校嶽水會山岳部

代表者 杉谷 岩彦
青山學院高等部學友會山岳部
代表者 外山 定郎

名稱並二代表者變更

府立高等學校報國團山岳班
代表者 相良 次郎

受贈會報部雜誌

京都山岳會京都山岳二十二年一號
昭和山岳會 會報一月號

偃松山岳會 會報新年號

東京アルカウ會 アルカウ一月號

福岡山の會 さふ里十五年十一月

マウントロバータグループ

大自然愛好團 爐端九號

東鐵やまをとこの會 會報二七號

日本ハイキングクラブ NHC二二號

阪神山岳會 山幸八二號

臺灣山岳會 彙報一月號

國立公園協會國立公園 十二月號

津峠の會 峠二十三號

京濱山岳團體聯合會 會報一號

六高校友會山岳部 遭難報告

沖電氣山岳部 部報一月號

日本旅行協會

旅行文化情報二十八號

雁ハイキンググループ 雁一月號

東京地學協會 地學雜誌一月號

Natural History December 1940.

STP Rec. 1940.

Trail and Timberline, December 1940.

Die Alpen, December 1940.

The Mountaineer, January 1941.

The Alpine Journal No. 261.

November 1940.

The Geographical Journal

November 1940.

Natural History, January, 1941.

寄贈圖書

「登臨行」(藤木 九三文)
相模書房發行

右 足立源一郎氏

森本大男著「樹林の山旅」

朋文堂發行

寄贈者 著者 森本 大男氏

深田久彌著「山の幸」

青木書店發行

寄贈者 青木書店

昭和十六年三月五日 印刷納本

昭和十六年三月八日 發行

頒價 二〇錢

日本山岳會内

編輯兼 塚本 繁松

發行所 日本山岳會

電話芝(四三)一六四九

振替東京四八二九

東京市芝區濱松町一丁目十三番地

印刷者 植田 庄助

印刷所 成文堂印刷所

ヒツサツの
専門店
片相
レント店

本邦天幕製
作業之嚆矢
各學校山岳
部指定製作

東京市神田區神保町三ノ一
電話九段(三三)三二一〇